国立国語研究所学術情報リポジトリ

『比喩表現の理論と分類』データの電子化および情報付与

メタデータ	言語:
	出版者: 国立国語研究所
	公開日: 2023-07-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 加藤, 祥, 浅原, 正幸
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000009

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 25: 1–19 (2023) Licensed under CC BY
ISSN 2186-1358

『比喩表現の理論と分類』データの電子化および情報付与

加藤　祥[a]　　浅原正幸[b]

[a] 目白大学／国立国語研究所 共同研究員
[b] 国立国語研究所 研究系

要旨

国立国語研究所報告 57『比喩表現の理論と分類』データの電子化を行った。主に同書における指標比喩用例と結合比喩リストのデータを検索や参照が容易な形式に整備した。また，同データに対して，比喩分類，喩辞･被喩辞，『分類語彙表』に基づく意味分類，指標（指標比喩のみ），結合，印象評定などの追加情報の付与を行った。付与情報により，新たな観点の調査や確認が可能となった *。

キーワード：電子化，比喩表現，指標比喩，結合比喩，情報付与

1. はじめに

著者らは，現代日本語における比喩表現の実態調査を進めている。今までに『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以降 BCCWJ）を用いた比喩表現用例の抽出を試みたほか，現在，手作業による網羅的な比喩情報の付与（加藤ら 2020）を進めている。これらの作業にあたって，大規模に比喩表現用例を収集した国立国語研究所報告 57『比喩表現の理論と分類』（中村 1977）の分類を援用し，データの参照や対照を行った。また，BCCWJ の比喩表現データの整備に並行して，中村（1977）に掲載された用例の，検索や参照を目的とした電子化を進めた。本稿では，中村（1977）の用例の電子化と付与情報について報告する。データの項目化や整備を行ったほか，大規模な用例データに様々な種別分類や印象評定等の情報を付与した結果，新たな観点での集計が可能となった。成果は，電子化された比喩用例データベースとして広く利用できるように公開した。今後，BCCWJ の比喩表現用例との対照やデータの検証に活用する予定である。

2. 中村（1977）のデータ概要

中村（1977）は，比喩を以下のように定義する。本稿データは，以下の定義に基づいて整備した。

---

* 本稿は 2022 年 5 月 28 日のアノテーション・述語の意味文法・学習者辞書 3 プロジェクト合同研究会にて発表した内容「「動詞の意味・用法の記述的研究」と「比喩表現の理論と分類」―国立国語研究所報告書の電子化」の一部である。また，本研究は国立国語研究所の以下の 3 つの共同研究プロジェクトおよび科研費 JP18K18519，JP22H00663 によるものである。（　）内はプロジェクト・リーダーを表す。
・「実証的な理論・対照言語学の推進」（浅原正幸）のサブプロジェクト「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」（浅原正幸）
・同サブプロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」（松本曜）
・「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（小木曽智信）のサブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」（柏野和佳子）

作成中の関連データについても，以下の定義を用いて整備を進めている。

> 比喩とは，表現主体が，表現対象を，それを過不足なく直接にさし示す言語形式を使わないで，その代わりに，言語的な意味では他の事物・事象に対応する言語形式を提示し，その言語的環境との違和感や，それが現れることの文脈上の意外性などで，受容主体の想像力を刺激して，両者の共通点を推測させることによって，間接的に伝える表現技法である。（pp. 154–155）

2.1 中村（1977）におけるデータ収集と本稿の位置付け

中村（1977）におけるデータ収集の目的は以下とされる。

> 今回の調査は，まず，比喩表現にはどんなものがあるかをできるだけ広くおさえ，そして，それらはどういう種類に分かれるかをできるだけ表現形式の言語的な性格に沿って考えることを目的とする。（p. 154）

中村（1977）のデータ収集は「第一次の用例採集」と位置づけられており，「できるだけ多種多様な比喩表現例を得るため」「高度でバラエティに富んだ用例の得られる可能性が高い」文学作品が用例収集対象とされている。目的が「現代日本語の比喩表現の実態をとらえることにある」ため，現代表記かつ口語体・散文の小説 50 編が対象となっており，約 2 万の比喩用例カードを作成したとある。中村（1977）の分類リストに用例として掲載されているのは，指標比喩と呼ばれるもの 1264 例，結合比喩と呼ばれるもの 5537 例，文脈比喩と呼ばれるもの 2434 例である。

中村（1977）の指標比喩は，「受け手側での比喩の成立に直接に形式的に関与している，特定の言語形式をそなえており，それを，2 項間の関係の特異性としてでなく，他から独立に抽出できる種類の比喩表現である」。なお，指標比喩を指標比喩たらしめる「特定の言語形式」を「比喩指標 [1]」と呼ぶ。結合比喩は，「何らかの言語単位，すなわち，接辞・造語成分・語・句などの間のある結びつきに，慣用からの顕著な逸脱や非論理性，少なくとも言語上の論理的な飛躍が感じられる種類の比喩表現である」。文脈比喩は，「その表現形式が表す言語的な意味と，それがその場で表していると思われる個別的な意味との対応に慣用からの著しいずれが意識される種類の比喩表現」で，「ある文脈におかれた時に（中略）その表現の基本的な言語的意味ではむしろ関連を持たないことを契機として，それとは違うその場での臨時の個別的な意味を推測させることによって，その全体が比喩として成立する表現だ，とも言える」とされる。

比喩表現を広く収集した用例集には，『比喩表現辞典』（中村 1995）などもあるが，辞典は「沼のようなぬかるみ（例文番号 921）」「疑惑が渦になってわき上がって（例文番号 4788）」「嵐のような喝采（例文番号 7016）」のような項目がリストされており，当該表現部分の前後が確認でき

[1]「比喩表現の指標比喩としての型を最も簡略的に示す形式全体を「比喩指標」と呼び，その比喩指標を構成する個々の要素を，比喩表現の目じるしの一部という意味で「比喩指標要素」と呼ぶ（中村 1977: 184）」。詳細は 2.3.1 節を参照。

ないという問題がある。それに対して，中村（1977）の指標比喩の用例集には，各比喩指標の典型的な用例について，概ね文単位，場合によっては複数文からなる記載がある。結合比喩や文脈比喩についても，いずれも出典およびページ数が特定かつ明記されているため，文脈の確認が可能であるという利点が大きいといえる。そもそも，指標比喩の用例は，10 万語あたり 100 例程度しか取得することができない。いわゆる比喩指標を用いた収集を行う際にも，「ような」「まるで」のような比喩指標を含む候補が実際に比喩表現であるかどうかに関して，人手による判断が必要となる。加藤ら（2020）は，中村（1977）の比喩指標要素とその類義語句（同じ分類語彙表番号の語句）を用いて，指標比喩の用例を BCCWJ から網羅的に収集することを目指したが，指標比喩用例の候補として，比喩指標要素を含む 97118 例中 822 例の指標比喩の用例を取得するに留まり，中村（1977）の指標比喩用例数に及ばない。中村（1977）は，大規模な比喩表現用例集であるといえる。また，本データの使い方として，比喩表現の全貌を概観するという第一の目的はもちろん，分類の分布，各分類の出現傾向，代表的な用例の確認などが想定されている。しかし，あくまでも紙面上での検索という前提であるため，個別の指標や分類については五十音順の索引を用いて用例検索をするよう指示されており，求める用例の検索は容易ではない。用例リストに加え，分類別の頻度表などが付されているとはいえ，部分的な集計や求める観点の集計がしにくい。比喩表現に関する心理学的な実験において中村（1977）のリストの一部を使用した研究（岡ら 2019 など）は見られるが，大規模かつ網羅的な収集を目指した用例集として十分に活用できていなかった。本データの利活用のためには，電子化が求められていた。

さらに，「現代日本語の比喩表現の実態」を調査するという目的のためには，中村（1977）で収集・分類されたデータと，1970 年代以降の近年の資料との対照や，小説以外から取得されると予想される「高度でバラエティに富ん」でいない用例との対照による分布調査などが期待される。そこで，電子化にあたっては，BCCWJ との対照が可能な形式への整備と，追加情報の付与も行うこととした。

なお，中村（1977）において，収集データの判定基準が内省判断によることについて「主観的になりやすく，また，主観的になることを結局は避けられないし，独断に陥らないという保証さえないのであるが（p. 160）」と指摘されている。同一人の判断による用例採集であればある種の規則性が担保されるものの，読者の違いによって比喩性評定の度合の差が生じる可能性がある。この点については，大規模に一般の方の比喩性の度合を評定する情報付与を加えることによる解決を目指した（後述）。

2.2 中村（1977）の類型と電子化対象

「読者がある言語表現を比喩だと考える際の言語側のよりどころ」として，中村（1977）においては以下の 3 類型があるとされる。

A 型把握（第 1 類）：概念の移行や転換のほかに，「表現主体の比喩意識の反映と見られる何らかの言語形式をそなえて（pp. 167–168）」いるグループ

A13[2] そこで和蘭の使節も同じように，将軍へ献上する進物を前に置き，将軍に対して坐し，額を床につけ，一言を発することもなく，あたかも蟹のようにそのまま後へ引きさがった。

B 型把握（第 2 類）:「表現を構成している要素間の結合，あるいは，成分間の呼応に，慣用からの著しいずれが見られ（p. 170）」ているグループ

B3　そういう古い憶い出が，東京の友人宅での冗談話に誘発され，帰りの電車の中で私をちくりと刺したのだった。

C 型把握（第 3 類）：特定の形式や構成要素間の異常な結合が認められず，「表現自体が比喩的な性格を内蔵してはいない（p. 171）」が，文脈上の意外性や無縁性が感じられるグループ

C2　打つべき釘を，打ち残した気持がつづき，香菜江は，答えをせぬことで，わずかに相手をはねかえす気組みを守った。

また，A 型把握（第 1 類）が「指標比喩」，B 型把握（第 2 類）が「結合比喩」，C 型把握（第 3 類）が「文脈比喩」に対応する。また，本稿のデータ化にあたっては，A 型把握の「指標比喩」と B 型把握の「結合比喩」を電子化の対象とし，文脈が必要とされる C 型把握の「文脈比喩」は対象外とした。「文脈比喩」の用例集は「中核部の構成要素の品詞性と助詞」による表示と指定ページとなっており，用例の確認には指定ページあるいは場合によって小説全文が必要となり，実際のデータ取得および電子化がしにくいためである。よって，本稿が電子化対象としたデータは，「指標比喩」における各比喩指標の代表例 1264[3] 例（および用例数），「結合比喩」における結合リスト 5537 例である。

2.3 中村（1977）の電子化と情報付与

2.3.1 指標比喩

中村（1977）によれば，用例のうち，表現主体の比喩意識を感じさせる何らかの言語形式が見られる場合（A 型把握），指標比喩と判断される。比喩指標は実現形[4]が抜き出され，傾向的に比喩と連動する可能性はあるが意味的に参与しない「傾向環境」が捨象される。活用形は代表形に置換され，比喩指標と比喩指標要素が認定される（例（1）を参照）。

[2] 中村（1977）の本文中で用いられた例文は，本文記載の例文番号で示す。以下の B3 と C2 も同様である。
[3] 但し，指標比喩は典型例のみが掲載され，同指標は取得された用例数のみが示されるため，指標比喩の用例数総計は 7521 例となる。各比喩指標（実現形）の用例数データについては，2.3.1 節に示す。
[4] 中村（1977）では「比喩指標」の抽象化の手続きを行わない出現形態を実現形と呼び，「傾向環境を除き代表形に直す抽象化の手つづきを，まとめて「比喩指標の実現形を基本形に変換する」と呼ぶ」（p. 185）。

(1)　彼の形相はまるで鬼をもひしがんばかりに見えた（p. 182）

中村（1977）の手順において，(1) の例の構造は「A はまるで B をも C んばかりに見えた」となり，この文の中で，文型や文法上の要請による形式で比喩とのつながりが認められないものが除外される。「んばかり」の「ん」と「に見えた」の「に」は，比喩との連動可能性があっても意味的に関わりがない「傾向環境」として区別される。この結果残る「まるで・も・ばかり・見える」という形式が「比喩指標」と呼ばれ，「まるで」「も」「ばかり」「見える」という各要素が「比喩指標要素」とされる。

本稿の作業では，比喩指標によって配列されている用例リストを電子テキストとし，再整理を行った。データのテキスト化と整理は手作業により作業者 1 名が行い，さらに情報を付与するに際し，第一著者が確認と修正を行った。電子化したのは以下の情報である。

・比喩指標要素（まるで，よう，みたい等，中村（1977: 448–452）の一覧表による）
・類（D（動詞類），F（副詞類），J（助詞類），K（形容（動）詞・助動詞類），M（名詞類），R（連体詞・接頭辞類），S（接尾辞類））
・種（D5（D 類 5 種「感ジラレル」），F2（F 類 2 種「イワバ」），K9（K 類 9 種「ヨウ」））
・号（D5-7（D 類 5 種 7 号「疑われる」），F2-1（F 類 2 種 1 号「いわば」），K9-1 等（K 類 9 種 1 号「よう」）等）
・実現形（に見える，をみるようなもの，あたかも・ような等）
・用例（文脈付きの実例）
・用例の通し番号
・用例の出典と異なり作品数（出典数），用例数

また，後述する結合比喩データや，BCCWJ の指標比喩データベースとの対照を目的とし，以下の情報を付与した。付与作業は第一著者が行った。

・結合

中村（1977）は，同じ表現において「指標比喩」と「結合比喩」とがあり得るとする。「A8 孤独はどんどん肥った，まるで豚のように。」の例のように，「まるで」「よう」という指標があるほか，「孤独が肥る」という「慣用から逸脱した」結合がある場合，同用例中に指標比喩と結合比喩とがあると考えるためである。

しかし，指標比喩用例と結合比喩リストの重複は示されず，「指標比喩」の用例に結合が含まれる場合にも結合の記述はない。よって，本稿の作業では，用例中に結合が確認された場合，後述の「結合比喩」の抽出に従って結合を抽出した。但し，結合要素の包含関係における内容概念が被修飾部にくる例においては，結合を抽出できない場合があった。次の (2) は，「あたかも密月の旅へでも出かけるように」が「さも愉しそうに」を説明する表現であるため，本作業では結合が抽出されなかった例である。

(2)　四月下旬のある薄曇った朝，停車場まで父に見送られて，私たちはあたかも密月の旅へでも出かけるように，父の前はさも愉しそうに，山岳地方へ向う汽車の二等室へ乗り込んだ。［立］[5]（用例番号：306）

・指標がない場合に文の成立が可能かどうかの判断

中村（1977）の「指標比喩」は「何らかの言語形式」として比喩指標が含まれる用例である。「指標比喩」の用例は，当該比喩指標がない場合に文として成立し得ない例が多く，(2) は比喩指標（実現形）「あたかも･でも･ように」なしには成立しない用例であるといえる。しかし，(1) は比喩指標がない「彼の形相は鬼をひしぐ」という文が成立する例である。比喩指標は，文の成立に必要な場合と必要ではない場合がある。そこで，本稿の作業では，結合の抽出に際し，あわせて用例中の比喩指標の削除が可能かどうか（文の成立が可能かどうか）の判断を付与した。「彼の形相は鬼だ」と「彼の形相は鬼のようだ」のような用例中の指標の有無に着目した調査は多い（Chiappe and Kennedy 2001，楠見 2005，岡ら 2019 など）。用例中の比喩指標の有無を検討する実験等に，本情報の活用可能性が考えられる。

・使い方

中村（1977）では，たとえば，(3) が実現形「にして」の代表例として掲載されている。しかし，本作業では，用例中の比喩指標要素「する」の出現部分が明確となるように，「使い方」として「手をメガフォンにする」部分を抽出した。結合は「手ガメガフォン［名ガ名］」として抽出されるため，変形操作（文型や文法上の要請による形式などで比喩とのつながりが認められないものの除外）を加えない比喩表現該当部を残してあるともいえる。

(3)　手をメガフォンにして，おおいおおい，と二度ほど声を張り上げた。［草］（用例番号：37）

・喩辞と被喩辞

該当語句を抜き出し,「喩辞」と「被喩辞」に分類した。喩辞と被喩辞は BCCWJ の指標比喩データベース（加藤ら 2020）に付与された情報であるため，同様の手順で作業を行った。なお，中村（1977）で情報の付与はされていないが，中村（1995）の索引に追記されている「イメージ」と「トピック」が，それぞれ喩辞と被喩辞に該当すると考えられ，本稿で報告している研究で抽出した情報はこれらに倣った。

・比喩の種別（転換の区別のほか，結合の構成要素による擬人化や具象化などの分類）

中村（1977, 1995）は比喩表現を「何らかの転換（カテゴリー間の移行）」とし，特に隠喩と直

[5] ［］内は出典の略語を示す。［立］であれば中央公論社版『日本の文学』における「風立ちぬ」である（中村 1977: 443–445）。

喩および諷喩を挙げ，「何らかの類似性をもとに比喩的な転換を果たす修辞」とする。また，典型的ではない転換として，換喩を質的な転換，提喩を量的な転換とし，類似性を基礎とした「典型的な比喩表現」とは転換の基盤が類似性かどうかという点において「一線を画する」ともする（中村 1995）。なお，「人はパン（食べ物全体を指す）のみにて生くるにあらず」「（前略）白いもの（白いもの一般ではなく特に雪に限定される）が（中略）空間を埋め始めた」のように，上位概念と下位概念（類と種）との置き換えを「提喩」とし，それ以外の関係での置き換えを含む「（前略）長官賞（錦鯉を勲章として扱う）がぞろぞろ泳いでいる」のような包摂関係にない例のほか，「禿げ頭は風呂敷包を解き」のような身体部位で人間を代表させる例などを，すべて「換喩」に含める（中村 1995）。

中村（1977）では，指標比喩の用例や結合のリストに転換の種別の記載はないが，「典型的（「類似性」による転換）」「典型的でない（「質的」転換・「量的」転換）」という種類の区別は，どのような比喩表現がどのように用いられているかという比喩表現の実態調査の観点として必要と考えられる。日本語における比喩表現の種類別分布，ジャンルや文脈などと頻度分布の関係を明らかにするためである。

よって，本研究では中村（1977, 1995）の区別に従い用例を分類した。典型的な比喩表現と考えられる「類似性」による転換，上位概念と下位概念との間に置換の見られる「量的」転換，それ以外の関係での置換を「質的」転換と分類した。また，中村（1977, 1995）のデータには付与されていなかったが，結合の構成要素の関係性が付与可能な場合は，「何らかの転換」に注目した内容面からの分類として下位分類を付与した。「擬人化：物（抽象物・具体物）を人に」「擬物化：人を物に」「擬生化：動植物に・活喩・準擬人化」「上記以外の具象化：抽象物を具体物に」「上記以外の抽象化：具体物を抽象物に」「その他の転換：別種の物事に」の 6 分類を付与した。この基準は，加藤ら（2020）でも同様に用いられており，対照を可能にする。

・分類外指標（分類項目以外に指標と考えられる表現）

各比喩指標の典型例として掲載された用例は，項目の比喩指標以外の比喩指標を含む場合がある。そこで，項目外の指標が含まれている，すなわち「何らかの言語形式」として比喩表現の判断において意識された指標があれば，抽出を行った。(4) は実現形「と露一つちがわぬ」項目の用例であるが，「としか思われなかった」部分が分類外指標として抽出された。当該部分は，分類の別項目に類似表現の「としか考えなく」もあり，比喩指標と考えられる。

(4)　それは父に逆らうときとか，妹の咲子をいじめるときとかにチラとあらわれるもので，その閃きは，私には嘉門が狂暴になるときの眉間の色と露一つちがわぬ色のものの芽生えとしか思われなかった。［冬］（用例番号：458，下線は本稿の著者による）

・印象評定

クラウドソーシングサービスを通じて募集した 1 事例あたり約 50 名による一般評定を付与し

た。評定値は 0 ～ 5 の 6 段階評価とし，データには値の平均値を付与した。用例全体と結合のそれぞれについて，評定実験を行った結果を付与した。用例全体については，加藤ら（2020）と同項目の，比喩性，新奇性，わかりやすさ，擬人化，具体性の 5 項目についての評定である。用例は複数の比喩表現を含む場合があり，指標と結合のどちらが比喩表現の把握に有用であるのか，あるいは当該用例がそもそも比喩表現を含むと判断されるのかなどの問題があるため，中村（1977）の掲載した用例を調査対象とした。

また，結合については，BCCWJ に付与している印象評定情報との対照が可能であるよう，比喩性，新しさ，わかりやすさに加え，自然さ，古さの評定結果を付与した。よって，結合が 1 つのみである例については，比喩性，新奇性（新しさ），わかりやすさの 3 つの観点について別途結合との対照が可能である。

電子化した指標比喩データおよび付与した情報について，一例を以下に示す。

類・種・号：D-12-1【電子化】
比喩指標要素：似る【電子化】
実現形：に似てくる【電子化】
用例：そういうときの父の眼はだんだんニワトリの眼つきに似てくる【電子化】
用例番号：130【電子化】
出典：［海］【電子化】
出典数：1【電子化】
用例数：1【電子化】
結合：父の眼がニワトリの眼つき【付与】
文の成立：無可【付与】
使い方：ニワトリの眼つきに似てくる【付与】
喩辞：ニワトリの眼つき【付与】
被喩辞：父の眼【付与】
種別：類似性：その他の転換（生物→人）【付与】
分類外指標：そういうとき【付与】
印象評定：【付与】
　用例全体　比喩性 3.10，新しさ 2.65，わかりやすさ 2.74，擬人化 2.52，具体性 3.14
　結合　自然さ 2.45，わかりやすさ 1.85，古さ 2.15，新しさ 2.30，比喩性 4.40

2.3.2 結合比喩

中村（1977）では，何らかの意味での結合上のずれが認められる場合，何と何との間に結合上の異常性が見られるかという点を基準として抽出された中核部が，結合比喩として分類されている（(5）の例を参照)。まず，各要素の文法的な性格，主として品詞に基づく組みあわせの種類によって分類され（名・名，名・形等)，動詞を構成要素に持つ場合は，動詞の自他の別により

二分されている（名・自，名・名・他等）。本研究ではこの分類情報をそのままデータ化している。

中村（1977）の手順では，まず用例の中核部を抽出し，代表形とする。

(5)　なんともいいようのない孤独感が押しよせてきた〔冬〕

（5）の例では，中核部として「孤独感が押しよせた」が抽出され，代表形「孤独感が押しよせる」と表される。

次に，名詞の格の違いに応じて細分される（名ガ他，名ニ他等）。「比喩関係を崩さないかぎり」態の転換や使役，修飾関係等について変形操作が施され（「無意味に襲われる」→「無意味が襲う」，「あこがれを納得させる」→「あこがれが納得する」等），注記（「受」「使」「順」等）が添えられる。

また，中村（1977）では，結合比喩の用例が結合要素の意味上のグループにより『分類語彙表』（1964 年版，国立国語研究所編）の順を用いて配列されている。分類語彙表に掲載のない結合要素については分類番号が推定され，結合の第 1 要素が同分類番号である場合は第 2 要素の分類番号順で配列されている。なお，サ変動詞は体の類（1.xxxx）ではなく，動詞の形で用の類（2.xxxx）の番号により分類されている。（5）の「孤独感が押しよせた」は，「1.3013 が 2.1560」という分類番号によって，1.3012 より後，1.3014 より前に配列されている。1.3013 のグループ内においては，2.1553 より後，2.1561 より前に配列されている。本作業では，これらの用例リストをテキスト化し，再整理を行った。テキスト化したのは以下の情報である。データのテキスト化と整理は，手作業により作業者 1 名が行った。

・分類（名ガ自，名ガ名ニ名ヲ他等）
・結合の通し番号
・第 1 要素～第 4 要素（助詞は別列とした）
・その他の記述（理解に役立つ最小限度の文脈として追記された語句）

そのほか，本作業では，他データ等との対照を目的とし，以下の情報を付与した。それぞれの情報付与作業における作業者は 1 名で，作業結果について別途作業者が確認を行った。

・分類語彙表番号

中村（1977）は結合比喩の用例を分類語彙表番号によって配列しているが，分類語彙表番号自体は記載していない。そのため，配列に使用されていると考えられる分類語彙表番号について，『分類語彙表増補改訂版』（国立国語研究所編，2004）の番号を新たに全要素に付与し直した。

・結合要素の種類（物・人・抽象等）

結合の慣用からの「ずれ」の調査を目的とし，結合要素の種類情報を新たに付与した。結合を構成する要素の種類は，典型的な比喩表現とされる「類似性」による転換が確認される場合，擬人化や具象化などの内容面の分類と関係する。また，今後，別途整備を進めている宮島（1972）

に記述のある動詞の選択制限を参照し，結合における選択制限の違反および違和感（比喩性等の印象評定）との関係を確かめることができる。

たとえば，宮島（1972）には「さえずる」について，「小鳥だけについて」いうとの詳細な記述がある。よって，中村（1977）の「林ガ囀る（923）」の例は，結合要素の「林」が選択制限に違反しているといえる。「林ガ囀る（923）」は後述する印象評定において一般に比喩性が高い（0～5段階評定における3.05）結果となっており，選択制限違反の影響が考えられる。この用例においては，「林」には「物（移動不可）」，「囀る」に求められる動作主には「動物（鳥）」という種類情報が付与されているため，比喩性の評定と選択制限の関係性が確認できる。

よって具体的には，結合比喩の構成要素に，「何」および「何について」いうか（動作主・対象等）の種類を付与することとした。「何」の種類はまず「具体」「抽象」に二分し，具体物（「具体」）については「人」「動物」「物」に分けた。また，「物」の下位分類として自然物（植物か，動植物であったが動かないものは「物（生）」）かどうか，動くかどうか（動かないか動かせないものは「物（移動不可）」），形があるかどうか（形がないものは「物（無形）」）を分けた。下位分類のない「物（その他）」はその他の物体全般とした。作業者は，宮島（1972）および『日本国語大辞典』を参照して種類を判断し，各結合の要素に「雨ノ脚」では「雨」に「物（無形）」，「脚」に「物（生）」，「気ガ引ける」では，「気」に「抽象」，「引く」に「物（その他）」の付与を行った。

・印象評定

各用例に，新たに印象評定情報を付与した。BCCWJ-WLSPの印象評定付与情報（加藤・浅原2022）および，指標比喩データにおける結合と同項目，同手法を用いており，対照が可能である。評定者はクラウドソーシングサービスを通じて募集した。1用例あたり約50名が評定を行った。評定値は0～5の6段階評価とし，データには値の平均値を付与してある。比喩性，新しさ，わかりやすさに加え，自然さ，古さの項目について付与した。

電子化した結合比喩データおよび付与した情報について，一例を以下に示す。

分類：名ガ自【電子化】
通し番号：95【電子化】
結合要素：意識ガ共鳴する【電子化】
その他の記述：ざわめきに【電子化】
分類番号：1.3000 ガ 2.5030【付与】
要素の種類：抽象ガ物（その他）【付与】
印象評定：自然さ 2.80，わかりやすさ 2.75，古さ 2.10，新しさ 1.90，比喩性 2.85【付与】

3. 中村（1977）電子化データに対する付与情報を用いた分析

ここでは，特に本稿で報告している作業で付与した情報（指標比喩用例の比喩表現種別，指標

比喩用例と結合それぞれの印象評定，結合要素の分類語彙表番号，結合要素の種類，結合の印象評定など）を用い，中村（1977）の集計表に加えて新たに明らかになったことを示す。

指標比喩の用例に含まれる比喩表現の種別を分類することにより，指標比喩の種別を観点とした分布の傾向や，指標比喩が結合比喩と同じ用例において共存する割合が明示的となった（3.1 節）。また, 付与した印象評定によって, どのような比喩表現が一般に比喩性が高いとされるのか, あるいは比喩表現と把握されにくいのかが確かめられるため，指標比喩の用例全体と結合の印象評定情報を用い，指標による A 型把握が比喩性認識に強く影響するのかを確認した（3.2 節）。さらに，結合を構成する要素の傾向を示す観点として，分類語彙表番号の分布を調査した。分類語彙表番号別の印象評定分布を確認した（3.3 節）ほか, 用例の最も多い組み合わせ「名ガ自（動詞）」について付与した結合要素の種別情報を用い，結合において体言の種類と用言の求める種類にどのようなずれがあるのかを見た（3.4 節）

3.1 比喩種別の分布

中村（1977）の指標比喩用例について，典型的な「類似性」による転換，種類による「量的」転換，その他の「質的」転換，の別を付与した結果を表 1 に示す。

表 1　中村（1977）の指標比喩用例における比喩種別の分布

種別	類似性	量的	例示等	質的	その他	計
表現数	615（48.7%）	507（40.1%）	122（9.7%）	10（0.8%）	10（0.8%）	1264（100.0%）

表 1 から，指標比喩において類似性の観点で転換が行われていると読まれた例（表中の「類似性」）は約半数で，「量的」転換や「質的」転換のような典型的比喩表現ではないと読まれた例が半数程度となっていることがわかる。

「指標比喩」の用例集においてはいずれの用例も比喩指標を含むため，指標の有無による区別は行っていない。なお，複数の比喩表現が含まれる用例については，項目の比喩指標（実現形）を含まない表現を集計外とした。すなわち，（6）は「まるで・とでもいうように」の用例として掲載があるため，用例中に含まれる「仮面をけしかけ，そそのかし」部分における「仮面をけしかける」「仮面をそそのかす」という結合ではなく，「仮面をけしかけ，そそのかす」という被喩辞に対する「嫉妬に未練がある」を喩辞とする表現を比喩表現として集計対象とした。

（6）　まるで嫉妬に未練があるとでもいうように，かえって仮面をけしかけ，そそのかしてさえいたものだ。［他］（用例番号：338）

慣用句と判断された表現，諷喩，判別が不能な例などは「その他」としてまとめた。「量的」転換では，喩辞と被喩辞の類似性を意識させる表現において「類似性」による転換との区別の判断が作業者により揺れる例が散見され，種別の分類には揺れが生じる。また，結合の異質性，選択制限の判断において揺れる例も多い。ここでは，当該用例のみでは比喩性が感じられにくく，「量的」転換とも読みにくかった（7）のような用例を，「例示等」として区別してある。

(7)　社会教育の参考資料にとでもいった調査的な聞きぶりだった。［母］（用例番号：719）

なお，加藤ら（2020）の収集した指標比喩用例の分析では，結合数かつ重複例も含む集計であり，複数名により比喩性が感じられにくいと判断された用例（例示等）が含まれないことから単純な比較はできないものの，類似性による転換が 6 割，量的転換が 1 割，その他質的転換が 1 割，慣用表現が 1.5 割という分布が見られている（p. 872 の表 7 を参照）。また，本データは，文学作品から取得された各指標の典型例のみであるという，用例集の特性の影響も考えられる。しかし，指標比喩において典型的な比喩表現とされる類似性による転換が大半ということはなく，典型的ではない転換の例であるゆえに「何らかの言語形式」が記述されている可能性も考えられる。関連して，次節では，「何らかの言語形式」による A 型把握と，「結合」による B 型把握の対照を印象評定の違いから確認しておく。

3.2 印象評定で見る A 型把握の影響

指標比喩用例に付与した結合情報により，指標比喩と結合比喩が同時に存在する例が確認可能となった。中村（1977）の指標比喩用例（1264 例）から，結合を含む用例（942 例）について結合（1 例中に複数結合を含む場合があるため，1494 結合）を抽出することができた。これらの用例は，「何らかの言語形式（指標）」による A 型把握と，結合による B 型把握が，同用例において行われている例である。（8）は，用例全体の印象評定値として，比喩性 3.09，わかりやすさ 2.68，新しさ（新奇性）2.63，および擬人化 2.24，具体性 2.88 が付与されている。また，用例中の結合として，「眼なざしが咲く」について，比喩性 2.90，わかりやすさ 2.05，新しさ 1.45，古さ 1.85，自然さ 1.95 が付与されているほか，「花弁がひろがる眼なざし」について，比喩性 3.65，わかりやすさ 1.45，新しさ 1.30，古さ 3.50，自然さ 1.65 が付与されている。

(8)　重い厚い花弁がひろがってくるような，咲くという眼なざしだった。［流］（用例番号：1204）

実例においては，「何らかの言語形式（指標）」による A 型把握か，結合による B 型把握のどちらが強く影響して当該比喩表現が比喩表現と判断されたのかを検証することは困難である。また，用例中の A 型把握に有用であった「比喩指標」が単純な実現形であるとはいい難く，複数の指標や，一般に比喩指標と考えられていない要素や文法構造などが「何らかの言語形式」として機能している可能性も高い。また，複数の結合による B 型把握が，用例全体の比喩性を上げるともいえない。（8）では，「花弁がひろがる眼なざし」という結合に，用例全体の 3.09 より高い，比喩性 3.65 という判定が付いている。

しかし，指標比喩用例全体と用例中の結合を対照することで，指標比喩における「何らかの言語形式」が比喩性の把握に関して影響を与えている可能性は検証できよう。また，比喩性の判定に際しては，A 型把握による「新しい」表現であるとの印象が影響する可能性がある。（8）は，用例全体の新しさが 2.63 と高めの判定であるが，2 つの結合はいずれも低い判定となっていた。

A 型把握における「何らかの言語形式」が比喩性の認識にどのような影響を及ぼしているのかを確認するため，ここでは，各用例全体と各結合について印象評定の平均値を集計する。比喩性，わかりやすさ，新しさ（新奇性）の 3 項目について，用例全体と結合の印象評定値が対照可能である。

表 2 に印象評定の集計平均を示す。比喩性，わかりやすさ，新しさのいずれの観点も，中核部として抽出された要素の結合よりも用例全体のほうが高い印象評定となっていることがわかる。「何らかの言語形式」による A 型把握は，B 型把握のみであるよりも，比喩表現における比喩性の把握を確かなものとしている。

表 2　中村（1977）の指標比喩用例における印象評定平均

	比喩性	わかりやすさ	新しさ（新奇性）
用例全体＝ A 型把握＋ B 型把握 平均（942 例）	2.88	2.68	2.52
結合＝ B 型把握のみ 平均（1494 例）	2.48	2.03	1.71

なお，加藤ら（2020）と同様，比喩性が高いと判定されるのは，（9）のように結合要素の一方が人にあたる擬人化の例に多く，低いと判定されるのは，（10）のように結合要素の一方が具体物にあたる具体化の例に多い傾向がある。（9）は，「丘が女の脇腹」という結合のみである場合，比喩性は 3.35 と低下する。（10）の「胸にためる」という結合も，比喩性が 1.65 とさらに低い。擬人化や具体化などの種別に関わらず，用例中の「何らかの言語形式」による A 型把握が比喩性の判断に関わっていると考えられる。

（9）　その丘はどこか女の脇腹の感じに似ていた。［田］（用例番号：258，比喩性：3.60）

（10）　ふだん胸にためていることを，この機会にぶちまけるといった調子である。［顔］（用例番号：1252，比喩性：1.95）

また，A 型把握によって，表現の新しさの認識が高まるともいえる。また，用例全体のほうが結合のみの提示よりもわかりやすいと判断される。これは，結合のみを提示されても文脈からの情報がなく，読み手が文脈や状況を推量する必要があるためでもあろう。

なお，中村（1977）の用例収集は，比喩表現であるとの判断が 1 名のみによるが，読者の違いによる比喩性の度合の差は本稿で付与した印象評定によって確認できるようになった。比喩性が高く判定されている用例は，一般的な読み手によって確実に比喩表現であると判断されているものと考えられる。表 2 の集計から，比喩性の観点の平均値は，0 ～ 5 段階で 3 未満であったため，一般的には比喩表現と判断されにくい用例も多いといえようが，3 以上の高い評定が得られた用例については，読者によって判断に揺れが生じにくいともいえる。（9）に見た擬人化の用例は，「擬人化」との認識も 3.53（平均 2.41）と高く，結合によって比喩性が把握された B 型把握の影響が強い例であろう。結合を構成する要素の種類によって，読み手が把握しやすい比喩表現の傾向があると考えられる。次節以降では，結合の要素の分布を確認したい。

3.3 結合における分類語彙表番号分布と印象評定

分類語彙表番号により，どのような分類の要素が比喩表現の結合に用いられるのかという分布が確認できる。ここでは，比喩表現の結合を構成する要素の主な例として，体言と用言の組み合わせ（「名＊動」および「名＊形／形動」）（3,852 件），体言の組み合わせ（「名＊名」）（801 件）の第 1 要素と第 2 要素について結合の分類語彙表番号分布を確かめる。さらに，結合比喩の印象評定を確認する。

表 3 に 2 要素の結合における要素の分類語彙表番号分布を組み合わせて示す。なお，第 1 要素が体言扱いでも体言ではない番号（「ごめんなさいね（ガ連絡する）」「センチ（ガ甘っちょろい）」など，主に口癖や性格などで人を表す用例がある）の用例が 22 件あったが，表では省略する。

表 3　中村（1977）の 2 要素の結合比喩における分類語彙表番号分布（類・部門）
表 3-1 「名＊動」および「名＊形／形動」

第 1 要素＼第 2 要素	2.1	2.3	2.5	3.1	3.3	3.5	用例数
1.1（抽象的関係）	245	171	43	17	7	12	495
1.2（人間活動の主体）	90	64	19	4	2	3	182
1.3（精神・行為）	919	607	184	84	31	54	1879
1.4（生産物・用具）	97	156	17	8	21	2	301
1.5（自然物・自然現象）	438	365	77	25	47	18	970
計	1789	1363	340	138	108	89	3827

表 3-2 「名＊名」

第 1 要素＼第 2 要素	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	用例数
1.1（抽象的関係）	20	20	26	15	27	108
1.2（人間活動の主体）	10	23	8	23	43	107
1.3（精神・行為）	97	26	46	56	131	356
1.4（生産物・用具）	13	5	14	12	25	69
1.5（自然物・自然現象）	35	12	37	29	58	171
計	175	86	131	135	284	811

結合中の 1 つ目の要素（第 1 要素）では，1.3（体：精神および行為），次いで 1.5（体：自然物および自然現象）の頻度が高い傾向にある。1.3 では「愛情」「心」など精神的かつ抽象的な語句，1.5 では「音」「光」などの現象，「胸」「顔」などの身体部位に関する語句が多いためである。2 つ目の要素（主に用の類）では，2.1（用：抽象的関係）と 2.3（用：精神および行為）の頻度が高い。2.1 は「歩く」「迫る」「あふれる」など，2.3 は「訪れる」「手伝う」などの動詞である。「心ガ転倒する（1.3 ガ 2.1）」「気ガ引ける（1.3 ガ 2.1）」「血ガ騒ぐ（1.5 ガ 2.3）」「暖かさガ見える（1.5 ガ 2.3）」のような例がある。

結合要素の組み合わせでは，1.3（体：精神）と 1.5・2.5（自然現象）や，1.5（体：自然現象）と 3.3（相：精神）・3.1（相：抽象）なども見られ，「声ガなだらか（1.5 ガ 3.1）」「初恋の芽（1.3 ノ 1.5）」や「雨の脚（1.5 ノ 1.5）」のような例がある。

表 4 は，結合比喩の印象評定の平均値である。指標比喩に含まれた結合（表 2 参照）とほぼ同じ評定値が得られている。

表 4　中村（1977）の結合比喩用例における印象評定平均

比喩性	わかりやすさ	新しさ	古さ	自然さ
2.48	2.29	1.77	2.14	2.32

表 5 では，表 3 と同様の 2 要素の結合 4653 例について，比喩性の印象評定値の平均を分類語彙表番号別に示した。表 5 でも，第 1 要素が体言ではない分類語彙表番号が付与された用例については割愛する。

第 1 要素が 1.3 である結合で，第 2 要素が 2.1 および 2.3 の結合は頻度が高い（表 3-1）ものの，比喩性がそれほど高い評定ではないことがわかる。この結合には「疑問ガ浮かぶ（比喩性：1.20）」「戦争ガ拡がる（比喩性：0.85）」「誘惑ニ打ち勝つ（比喩性：0.55）」などの例が見られる。

表 5　中村（1977）における第 1 要素が体言の結合比喩用例の分類語彙表番号別「比喩性」印象評定平均

表 5-1 「名＊動」および「名＊形／形動」

第 1 要素＼第 2 要素	2.1	2.3	2.5	3.1	3.3	3.5
1.1	2.37	2.25	2.62	2.31	2.32	2.61
1.2	2.35	2.28	2.66	2.46	1.95	3.03
1.3	2.38	2.31	2.68	2.40	2.43	2.69
1.4	2.63	2.58	2.60	2.26	2.68	2.35
1.5	2.59	2.60	2.75	2.64	2.70	2.48

表 5-2 「名＊名」

第 1 要素＼第 2 要素	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5
1.1	2.42	2.24	2.43	2.81	2.71
1.2	2.52	2.45	2.05	2.84	2.92
1.3	2.43	2.55	2.43	2.82	2.82
1.4	2.60	2.24	2.57	2.25	2.78
1.5	2.56	2.55	2.63	2.89	2.90

第 1 要素が 1.3 の場合，第 2 要素が「.5（自然現象）」であると比喩性の高い傾向がある。第 1 要素が 1.3 で第 2 要素が「.5」の用例には,「怒りガ黒い（比喩性：4.10）」「愛ガ燃え盛る（比喩性：3.95）」などがある。1.3（体：精神および行為）の要素と 2.3（用：精神および行為）の要素の結合数が多い傾向（表 3-1 参照）は，加藤（2020）の BCCWJ の新聞サブコーパスを用いた分類語彙表番号の中項目（分類語彙表番号のピリオド以下 2 桁）分布においても同様であり，精神に関わる分野の表現が，日本語比喩表現に最も多いと考えられる。但し，文学作品を主体とした中村（1977）でのみ，1.5 と 2.1 の頻度が高いという結果が確認されたため，文学作品と文学作品以外とで結合の分布が異なる可能性があろう。今後，BCCWJ-WLSP（加藤ら 2019）に付与された比

喩表現情報を用いたレジスタ別の分類語彙表番号分布を確認し，結合とジャンルを含めた文脈情報の対照を目指す。

3.4 結合における要素の分類語彙表と種別分布（「名ガ自」を例に）

中村（1977）の結合比喩は，表現を構成している要素間の結合，あるいは，成分間の呼応に，慣用からの著しいずれを見るというB型把握による。よって，たとえば結合が「名詞ガ自」であれば，主体となる名詞と動詞の求める種類（「何について」）との呼応にずれが生じているはずである。ここでは，本稿の作業により結合比喩の構成要素に付与した種類情報分布（2.3.2節の「結合要素の種類（物・人・抽象等）」を参照）を確認しておく。変形操作により最も結合例の多い分類となっている「名ガ自」1262例を見てみたい。

「名ガ自」の結合1262例において，最も多い分類語彙表番号の結合は「名」1.3ガ「自」2.1の375例，続いて多い結合は「名」1.5ガ「自」2.1の217例であり，「名」1.3ガ「自」2.5の124例が次ぐ。表5で見た全体の分布と同様の傾向にあるといえる。結合比喩の「名ガ自」の第1要素に該当する名詞「名」について，種類の分布を表6に示す。1.3の9割近くが抽象物であり，1.5では半数近くが無形物であるという傾向が確認できる。「名ガ自」の結合では，「観念ガ崩壊する（1.3ガ2.1）」「笑いガ充満する（1.3ガ2.1）」などのように，多くの「名」が抽象的か形のないものであることがわかる。

表6　中村（1977）の「名ガ自」結合の「名」の種類分布

種類＼類・部門	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	3.1	4.3	総計
人	2	37	0	0	1	0	0	40
物（生）	2	0	0	0	116	0	0	118
物（その他）[6]	3	0	3	64	18	0	0	88
物（移動不可）	0	3	0	25	12	0	0	40
物（無形）	22	7	62	17	160	0	0	268
抽象	127	8	524	0	46	2	1	708
総計	156	55	589	106	353	2	1	1262

「名ガ自」の 第2要素「自」にあたる動詞が，名詞に求める種類の分布を表7に示す。表7から，2.3の分類では，8割以上が「人」を求めている。また，2.1の分類では，7割弱が「物（具体物）」，3割弱が「人」を求めていることがわかる。

表6と表7の種別を「名ガ自」で組み合わせた結果を表8に示す。表8から，「抽象物名詞ガ具体物を求める動詞」（具象化：「記憶ガ染まる」「無駄ガ転がる」など）の結合，「抽象物名詞ガ人を求める動詞」（擬人化：「心ガ呟く」「知覚ガとまどう」など）の結合が特に多いことが確認できる。これらのことから，「名ガ自」の結合例は，名詞の種類と動詞の求める名詞の種類の間

[6] 具体物のうち，下位分類のつかなかった物体の集計である。分類の詳細は2.3.2節に記述した。以降の表7～9も同様である。

にずれがあると考えられ，具象化や擬人化のような類似性に基づく転換が多く見られるといえる。

表 7　中村（1977）の「名ガ自」結合における動詞が求める名詞の種類の分布

	2.1	2.3	2.5	総計
人	200	218	4	422
動物	57	11	74	142
物（生）	0	1	1	2
物（その他）	512	28	126	666
物（無形）	0	0	30	30
総計	769	258	235	1262

表 8　中村（1977）の「名ガ自」要素の結合関係（例数）

名＼自[7]	人	動物	物（生）	物（その他）	物（無形）	総計
人	7	4	0	28	1	40
物（生）	60	18	0	37	3	118
物（その他）	49	29	0	9	0	87
物（移動不可）	23	4	0	13	0	40
物（無形）	88	28	2	148	3	269
抽象	195	59	0	431	23	708
総計	422	142	2	666	30	1262

また，要素の結合における比喩性の印象評定値を表 9 に示す。表 9 から，「無形物名詞ガ動物を求める動詞（「吹雪ガ唸る」「風ガ吠える」など）」の結合，「物体名詞ガ人を求める動詞（「胃ガ夢見る」「瞼ガ笑う」など）」のような擬人化および擬生化の結合で，比喩性判定が高くなる傾向にあることが確認できる。反対に，「抽象物名詞ガ具体物を求める動詞」の結合は比喩性判定が低い。「記憶ガよみがえる（1.55）」「心ガあたたまる（1.55）」のような「新しさ」の観点の印象評定も低く，一般的な読み手が比喩であるとは判定しにくい用例が多い傾向にある。

表 9　中村（1977）の「名ガ自」要素の結合における比喩性評定（平均値）

名＼自	人	動物	物（生）	物 (その他)	物（無形）	総計
人	2.14	2.45		2.55	2.90	2.48
物（生）	2.59	2.70		2.77	2.17	2.65
物（その他）	2.81	2.63		2.55		2.72
物（移動不可）	2.60	2.88		2.54		2.61
物（無形）	2.78	2.94	3.50	2.62	2.83	2.71
抽象	2.46	2.78		2.45	2.51	2.48
総計	2.59	2.77	2.80	2.51	2.52	2.48

なお，前節の表 5-2 で示した体言・体言の組み合わせにおいても，第 2 要素に体の部分などが多い 1.5 の場合の比喩性の印象評定が高くなる傾向が確認できる。結合要素がいずれも具体物

[7] 自動詞については，一般的に「何について」いうか（何を求めるか）を示す。表 9 についても同じ。

（「氷ノ目（1.5 ノ 1.5）」など）では高めとなり，いずれも抽象物（「打撃ガ帳消し（1.1 ガ 1.1）」など）では低めとなる傾向もある。抽象物に関する比喩表現では，「名ガ自」に限らず比喩性が低めに判定されやすい。

4. おわりに

中村（1977）の指標比喩用例と結合比喩リストの電子化とデータの整備を行った。データの整備に際しては，BCCWJ の指標比喩データベース（加藤ら 2020）や，現在比喩表現の付与を進めている BCCWJ との対照を目指し，追加情報の付与も行った。本稿では，電子化した指標比喩用例および付与情報のデータを用いた調査例として，比喩表現における転換種類による分布傾向を調査したほか，指標比喩と結合比喩が共存する場合について，指標比喩用例全体と含まれる結合の印象評定の差異を確認した。また，結合リストおよび付与情報のデータを用い，結合要素の分類語彙表番号の分布，結合要素の「ずれ」に関する調査を行った。

付与した追加情報を用いることで，中村（1977）の多用な比喩表現データを新たな観点で分析することが可能となった。今後，日本語比喩表現の実態調査の参照データ，検証データとして活用したい。

参照文献

Chiappe, Dan and John M. Kennedy (2001) Literal bases for metaphor and simile. *Metaphor and Symbol* 16: 249–276.
岡隆之介・大島裕明・楠見孝（2019）「比喩研究のための直喩刺激―解釈セット作成および妥当性の検討」『心理学研究』90(1): 53–62.
加藤祥（2020）「日本語比喩情報付与コーパスの作成と新聞における比喩実態調査の試み」『認知言語学の羽ばたき―実証性の高い言語研究を目指して―』144–159. 東京：開拓社.
加藤祥・浅原正幸（2022）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する印象評定情報付与」『言語処理学会第 28 回年次大会発表論文集』1524–1529.
加藤祥・浅原正幸・山崎誠（2019）「分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の新聞・書籍・雑誌データ」『日本語の研究』15(2): 134–141.
加藤祥・菊地礼・浅原正幸（2020）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく指標比喩データベース」『自然言語処理』27(4): 853–887.
楠見孝（2005）「心理学と文体論：比喩の修辞効果の認知」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子（編）『表現と文体』491–501. 東京：明治書院.
国立国語研究所編（1964）『分類語彙表』（国立国語研究所資料集 6）東京：秀英出版.
国立国語研究所編（2004）『分類語彙表増補改訂版』（国立国語研究所資料集 14）東京：大日本図書.
中村明（1977）『比喩表現の理論と分類』（国立国語研究所報告 57）東京：秀英出版.
中村明（1995）『比喩表現辞典』東京：角川書店.
宮島達夫（1972）『動詞の意味用法の記述的研究』（国立国語研究所報告 43）東京：秀英出版.

関連 Web サイト

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/（2022 年 8 月 27 日確認）
国立国語研究所 コーパス検索アプリケーション『中納言』https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2022 年 8 月 27 日確認）

Digitization and Annotation of "A stylistic study of the figurative"

KATO Sachi[a]　ASAHARA Masayuki[b]
[a]Mejiro University / Project Collaborator, NINJAL
[b]Research Department, NINJAL

Abstract
We digitized the National Language Research Institute Research Report "A stylistic study of the figurative" and constructed a database of figurative expressions in the Index (simile) and Combination (metaphor) systems. The database was designed to support the search for figurative expression examples in several respects. We also annotated the figurative expression classification, figurative index expressions (simile only), topic and vehicle pairs, and semantic categories with the "Word list by semantic principles," figurative combinations, and impression ratings. The annotation enabled us to explore the figurative expressions from new perspectives.

Keywords: digitization, figurative expressions, similes, metaphors, annotations